

アユ人工配合飼料の研究（要旨）

岡 彬・菅生 裕・戸田久仁雄・高橋 昭夫

Studies on the Artificial Diets of Larval Ayu *Plecoglossus altivelis* (Abstract)

Akira OKA, Yutaka SUGO, Kunio TODA and Teruo TAKAHASHI

全国湖沼河川養殖研究会アユ初期飼料研究部会では、ふ化後60日前後（全長2.5mm）からの健全な種苗を育成するための人工配合飼料の開発を目的として、関係機関による連絡試験を実施しているが、本年度はこれまでの飼料をもとに、レシチンの添加が仔魚の成長、生残、体形異常の発生防止にどのような効果をもつかについて試験を実施した。

本試験の結果については、アユ初期飼料研究部会「初期人工配合飼料の研究」昭和58年度連絡試験報告書としてすでに報告されているので、ここでは要旨のみを記載する。

1 試験区は基本飼料区（1区）、大豆レシチン6%添加区（2区）、卵黄レシチン6%添加区（3区）の3区で、各2槽ずつ設けた。

2 供試魚はふ化後89日を経過した平均全長28.46mm、平均体重70.0mgのもので、0.5トンパンライト水槽6面に約1,000尾ずつ収容し、人工汽水の循環濾過方式により飼育した。

3 各区とも試験開始時からよく摂餌したが、卵黄レシチンを添加した3区の餌は、他区の餌と比べて凝集がみられ、フロックのまま沈降することがあった。

4 試験開始後11～13日目に1区の水槽1および2区の水槽1において、水質の悪化によると思われる大量への死がみられた。

5 各区の飼料の飼料効果を求めるため、試験終了時（60日後）の生残率（生残指数）と増重量（増重指数）の相乗積から1区（2槽平均）を100とした場合の各区の指数（飼料効果指数）を算出したところ、2区は163、3区は116となり、2区が最も優れていた。

また、増重量や飼料効率でも2区>3区>1区の順であった。

6 これらのことから、レシチンの添加は有効であったと考えられ、大豆レシチンと卵黄レシチンとでは大豆レシチンの方が高い添加効果が認められた。

7 しかし、本試験の飼料効率は従来の試験に比べて全般的に低く、十分な試験結果とはいえない。